

俗語の「キレる」がはや
りだしたのは八〇年代だっ
た。今や若者に限
らず「キレやすい
中高年」の存在は、
ささいなことでも
高を招く単純社
会、反知性主義の
象徴だ。逆に忍耐
という言葉は死語
になりつつある。

波 小 波 大

しかしこのたび題名もず
ばり『山椒魚の忍耐』（水

声社）が出た。勝又浩の労
作で井伏鱒二論である。今
年が井伏の生誕百二十年な
のは本紙既報のとおりで、
野崎歓『水の匂いがするよ
ろ』、岩穴から出られなくな

耐える生き方

うだ』も八月に出ている。
野崎も「耐え忍ぶ」との言
葉で井伏の特徴を指摘する
が、忍耐とは外圧に耐える
ことではなく、自らの屈託
た山椒魚は、現代の頭でっ
かち社会を象徴するとも
に、自意識の壁を越えられ
ない現代人にも喩えられ
る。それは諦念ではなく忍

耐だと勝又は指摘する。戦
争のためにも平和のためにも
も旗を振ることもなく、庶
民の目の高さで洞察する井
伏の生き方だ。

井伏の文学の奥の深さと
ジャンルを超えた幅の広さは
論者指摘のとおりだが、
同書の出版を機にしての再
読はキレやすい首相をいた
だく国民にとって有意義な
ことである。

（ドリトル先生）